

中華人民共和国は建国四十年にして、解体への第一歩を踏みだした。おそらく全中国では数千名にものぼるであろう、無抵抗の学生や市民への殺戮という悲劇的な代価を伴って。中国四千年の歴史からすると、中華人民共和国の存在は、歴代王朝史のあいだに興亡する短命の皇帝権力と同様のものだというところにあるいはなるかもしれない。今回の学生、市民の民主化要求運動が、レッド・チャイナを崩壊の危機に到らせるまで拡大し深化したプロセスが歴史的に意味するところはいきわめて大きかった。鄧小平——李鵬——楊尚昆ラインの中国当局は、「四、五月革命」と呼ぶにふさわしい今回の「人民の波」を「反革命的暴乱」だときめつけているが、それは決して「反革命」ではなく、まさに市民革命的な「反・革命」なのであって、Counter Revolution という言葉が今回ほど鮮烈な響きをもって世界史に登場したことはなかったのではない。

中華人民共和国はこの四十年間、常に政治的に不安定であった。根本的には中国共産党の一元独裁がそもそも無理だったというところであろう。受け皿である中国民族、つまり漢民族にはこの体制はあまりにも不適合であったように思われる。

抵抗ではなかったかと思わせる。

中国共産党の一元独裁、その象徴として超法規的に存在する鄧小平と、李鵬に代表される党官僚らに対して鋭い政治意識を持った学生や知識人たちが抵抗を始めたのであったが、学生達の掲げる民主化要求とは、具体的にいうと、法を無視して君臨する鄧小平らの「人治」を排し、憲法あるいは党規約に基づいた政治、つまり「法治」を要求したのであった。しかし、鄧小平は一貫して黒幕としての立場から鎮圧を指示し、党・政府官僚としての李鵬がその指示を制度化し、最後的には流血の実行部隊長として楊尚昆という軍人が登場して、楊尚昆一族が流血の下手人となって「血の日曜日」を断行したのであった。天安門広場の大衆に一斉に銃を発砲して大量殺戮をするという、近代中国の歴史始まって以来の、また社会主義の歴史にもなかった暴挙を行ったのである。全く無抵抗、非暴力の学生や市民にたいして、人民解放軍が、その名に背反する暴挙に出たのであり、トトラーやスターリンですらなし得なかったことだと言っても過言ではあるまい。

党権力がこのような事態におよばざるをえなかったのは、まさに新たに出てきた民衆レベルの水平的な意識の成熟、ヨコ社会の抵抗のあまりの大きさに、権力をもちこたえるのが難しくなってきたからである。それほど今回の民主化要求運動は画期的な意味を持っていたと思う。北京だけでなく、上海、南京、成都、ハルビンなど中国各地への広がりも目を見

そもそも中国は伝統的に農村共同体を基盤とした地縁・血縁のネットワークが発達した社会である。民衆レベルは常に水平的に動いており、なかなか上からの支配が貫徹しにくい、いわば潜在的に柔構造的なヨコ社会だといえるだろう。そこに社会主義権力、共産党一元独裁を基軸にした一種のヒエラルヒー、すなわちタテ割りのシステムを強引に導入してもうまくいくわけがないのである。

毛沢東は文化大革命時に中国社会を、上からの強権的支配によってタテに構造化し、ヨコ社会特有の隙間を全部「毛沢東思想」で埋めようとした。しかし毛沢東ほどのカリスマ性と指導力を以てしても、それは無理であり、毛沢東が挫折したのはむしろ当然であった。次に続く鄧小平体制も、経済改革、経済開放をうたってはいたが、そのことによって水平的に動きはじめた民衆の意識や財の動き、情報の交流という新しいネットワークキングに対して、依然として古くさい共産党の一元独裁による締めつけを貫徹しようとしたために、いよいよたまりかねた民衆が抵抗を始めたのであった。

今回の一連の事態を見ると、毛沢東時代を脱して十数年たつ今日の時代に生まれた、全く新しい政治意識に基づく張るものがあつた。香港や台湾、東南アジアの華人社会、アメリカ、日本などにいる中国の留学生たちや中華街の人びとにまでも輪が広がっていったのである。それらの人たちが初めて自分たちの祖国、大陸をどうしたらいいかという共通の危機意識に立つてみずからのアイデンティティを求めはじめたのであった。タテとヨコとの関係からすると、地球的規模にまで広がったヨコ社会的なつながりのニューウェーブが生まれたと考えるのもいいと思う。これは今までになかったことである。だいたい漢民族は商業民族だから、自分の利益とか共同体の利益しか眼中にないことが多い。それが今回はそうした枠組を越えてある意味ではインターナショナルな意識が、水平的に生まれたのであるから、画期的なことだといえよう。

当面は、強権による弾圧が功を奏し、多くの学生、知識人が拘禁されるなどして軍をバックにした恐怖政治がしかれるのであろうが、そうであればあるほど民衆の抵抗は沈滞し、現状の中国共産党一元支配体制は、とても今までのようには維持できないだろう。ポスト鄧小平時代への展望も含めて考えれば、まさに中華人民共和国解体が始まりつつあると言えるのであり、全く新しいもう一つの中国革命が胎動しつつあるのだとも言えるだろう。

さて今回の一連の騒乱の背景には、中国が経済の面でどれだけ近代化をなしているかという歴史的課題が背景にあつた。もともと伝統的共同体の中で地縁・血縁のネットワークを中

心としてきた社会であるから、なかなか産業化しえない状況が中国にはある。

「中国の経済には大きな可能性がある。経済改革は成功であった」などと日本の政府当局者やバンカーたち、エコノミストたちの多くが(飯田経夫氏などを貴重な例外として、多くの近代経済学者も)口を揃えて強調していたが、私には随分実際とはかけ離れたことをいっているな、としか感じられなかった。北京に行つて、中国の人ではごく一部の人間しか泊まれないようなホテルに泊まり、人民大会堂のような場所で会議をして帰つてくれば、中国も随分近代化したものだと感じられるだろうが、それでは中国のショーウインドーの中のスポットライトを浴びている部分を見ているにすぎない。日本人の中国経済に対する現状認識の甘さがかなりあつたと言えよう。

中国経済を本気で発展させようとするのなら、まず中国的自己中心主義の「事大主義」、「中華思想」を徹底的に乗り越えることが何よりも必要だと思ふ。今回民主化を要求して立ちあがつた学生、知識人たちに果たしてそれができるかどうか。私は彼らに期待したいが、もしそれができなければ、経済発展どころか、群雄割拠する混乱した古い体質の中国に逆戻りすることになるだろう。今回のような極限的事態が起こつたことによつて、中国社会がこの悲劇を代償として将来どのような国家形成をし直すかが注目されるころである。

そこで私が前から考えていたことだが、香港や台湾とい権が崩れて、社会主義システムという上からの硬直的なタテ割りの構造が打破されなければならない。それが打破されれば市場経済の原理を導入しても効率的に動いていくだろう。

当面は明日どうなるかが問題であり、学生、知識人への大弾圧が始まりつつあるなかで、事態はお流動的であるが、新しい政治意識のもとに立ち上がった学生や知識人たちは、長期的に見て、今後の中国をどのように再生し、発展させていけばいいかまで考えなければならぬ。そのためには、中国と中国人はもつと寛大にならなくてはならないだろう。あまりニュースにはならなかったがチベットには昨年来戒厳令が施行されている。去年の春、秋とたいへん深刻な民族反乱が再び起こっている。当然であろう。歴史も、文化も、民族も、言語も違う。それを「中華思想」で漢民族の下に統一しようということ自体が無理なのである。しかも共産党のもとにタテ割り構造の一ブロックにまとめてしまおうとするのだからなおさらである。民族の自主、自決の原則に立てば当然チベットは独立するか、少なくとも広範な自治権をもつ連邦体にしたほうが自然である。モンゴルだって分断国家であるし、新疆ウイグル地区だって民族分断の状態にある。こうした民族問題は中国の場合、ソ連邦よりもっと苛酷である。漢民族中心の中央集権的な支配体制で隠されてきたが、これからはどうやってそのような民族問題に対処していくかをも考えなければならぬ。

つた外の中国人社会との連係の上に、ある種の水平的な連係関係を作り上げてゆけば案外うまくいくのではないだろうか。それは中国当局の言う「一国兩制」などではなく、できれば大陸も連邦制のようにして、経済の近代化、市民社会的な政治力を競い合うような形にすることである。たとえば広東省は香港と一緒にして完全に自由してみたらうまくいくのではないだろうか。あるいは福建省を台湾と同じようなモデルにしてみる等々。このような形でゆるやかな連邦制を作ることができれば、中国民族自身は優秀な民族であるのだから、発展の可能性は大いにあつたと思う。

台湾を見てみるがいい、確かに後発国としてのキャッチアップで多くの技術や資金を先進国から吸収し得たというメリットもあつたが、李登輝総統という新しい開明的な指導者のもとで、政治改革をさらに進めつつあり、経済的にも社会的にも、アジアNIEsの中でもっとも安定している。日本に次いで外貨準備では世界第二位の地位にあり、台湾のあり余る資金が将来どう動くかで、アジア全域に大きな影響を与えたいわゆるほどの成長ぶりである。台湾を見てみると、漢民族だから工業化できないという偏見は吹き飛んでしまふだろう。今回の中国の一連の動きの中でも、台湾の成功もたらした影響がかなりあつたはずである。中国も台湾の経験を見習つていけばいいのだ。

そのためにはまず、共産党の一元支配、あるいは共産党政つまり今の民主化に立ち上がっている学生、知識人や市民がチベット族の反乱にも共感を示し得るのかどうかポイントである。自分たちの問題として共産党の支配には抵抗するが、チベット族を漢民族が弾圧することに對しては知らんぷりをするというのであれば本物の民主化要求ではない。あるいは今の台湾の置かれている状態についても、台湾の人たちにどれだけ理解を示すか、あるいは香港についてはどうするのか。これから八年後に香港は中国に回収されることになっているが、今回の事態によつて、これには非常に大きな抵抗があるだろう。香港はもともと大陸から逃れてきた人たちのふきだまりのようなところであるのに、その彼らが自分たちの問題として、大陸はどうなるか、香港をどうすべきかと、新しい政治意識に目覚めてきたのである。私は香港が中国に返還される方がいいことだとおもは思えなから。一つの連邦自治体という形で現状のまま残った方が、中国にとつても香港にとつてもいいように思う。

チベット、香港あるいは台湾をみただけでも、漢民族の中央集権的な「中華思想」でやってきた中国人社会の古い壁が崩れるかどうかという段階にいいよ来ていいる。その意味では、今回の悲劇は新しい中国人政治社会の芽生えのチャンスかも知れない。これだけ漢民族人口が大きくなっているのだから、いろいろな漢民族社会があつてもいいではないか。そこまで許容できなければならぬだろう。今の学生や知識人

たちがそういう所まで開かれていくことこそが必要なのである。さもなければ、ますます人口が増えていく十何億の漢民

族社会をまとめていくことはとても無理であろう。

(なかじま みねお・東京外国語大学教授)

「政治的マラリア」という病い

— 竹内実 —

目下、中国の政権担当者は、国内国外にわきあがった非難の大合唱にかこまれている。

「時間をおいて熱をだす」という「時間」とは、十年周期だったのかもしれないと、わたしは昔の文章をとりだしてきて、あらためて考えているのである。拙著『友好は易く理解は難し』サイマル出版会、一九八〇年刊。

「四面楚歌」。

きのうだったか、北京のテレビがうつしたかれらは、しかしそれを意に介しているふうにはみえなかった。ある人物は、大きな口をあけて笑っていた。高笑い、である。ただしテレビは笑い声を伝えず、ややもの足りない感じをもった。

それはともかく、ここでは、国家せんたいを考えてみたい。個人の善意（もしくは悪意）を超えた、国家の運動の法則というものがある、とわたしはおもう。

以前、わたしはつぎのように記したことがある。

——実体としての中国社会は、長い歴史をもち、かつ広大な国土にひろがった、大きな、ぶよぶよした生き物のような存在である。しかも、その生き物は、マラリアのような存在である。しかも、その生き物は、マラリア、政治的マラリアともいべき病いにかかっている、時間をおいて熱をだす。

右の文章を書いたのは、ちょうど十年まえのことである。

中国のことが、わかりにくいのは、内部のニュースが外部に伝わってこないことにもよる。ニュースは、たとえそれが事実であるとしても、たった一通の電報だけでは、判断に苦しむことがある。ある程度の量がなければならぬ。

そこで、わたしの、「生き物」であるという比喩、「政治的マラリア」を病んでいるという比喩、「時間をおいて熱をだす」という比喩は、いわば窮余の一策であったといえなくはない。科学的でないという批判は、あろう。

しかし、この窮余の一策も、突然におもいついたのではないことは、読者にも了承してもらえよう。わたしの周期変動説

は、十年を一周期とするが、さらに分けて五年をひとつの周期とし、それをさらに二年半の周期とする。

胡耀邦^{フヤウバン}の失脚は、二年半まえである。かれを失脚させるうごきは、それより以前からあったにせよ、胡を失脚させるべくこれを推進した勢力は、胡にかわって登場した李鵬^{リポン}に、ようやく主役としての役割を演じる舞台を、ここにしつらえることができた。この光景は二年半前には予測できなかったのであるから、やはり周期がくりと一回転したといえよう。

十年周期説は、十年を経過すると、別の局面が展開する、ということである。

改革と開放の政策は、ざっと十年つづいた。途中、これに逆行するうごきがあり、その逆行するうごきというものが、こんなにちの事態につながっているのであるから、十年間を一色に塗りつぶすことは、ためらわれるが、しかし総体としては、改革と開放であった。

これは、ひとびとから喜ばれる傾向であった。わたし個人としても、この政策の恩恵をうけなかったとは、いえない。けれども、ひとがいうように、これをもって「ノー・リターン」であるとか、「もう二度ともどらない」とか、信じることはできなかった。中国のこの新傾向を歓迎するひとは「新时期」と名づけた。日本では「転換期」とも呼ばれた。なるほど、なるほど。そうでもあろう。

あえて正面きって反対しなかったが、全面的に双手をあげ

て賛成というわけにはいかなかった。そこで、「転形期」と呼ぶことにした。具体的には一九八〇年から一九八七年の期間である。

一九八八年一月に、「沿海経済発展戦略」が中国大陸でいわれはじめた。海岸に面した地区に加工貿易区を設け、そこが発展することによって、全体の経済を牽引していこう。

これを聞いたとき、おもった。——「四つの近代化」もようやく現実的な一歩を踏みだしたな。

それで、もうそろそろ「転換期」と名づけてよいのではないかと考えたのである。しかし、そのあとを追うようにして聞えてきたのが物価上昇のうごきであった。

危険信号である。

近代化は、物価上昇をとまらう。とりわけ、低物価、低賃銀、低生産の社会主義が部分的に資本主義をとりいれて、高物価、高収入、高生産、に移行しようとするとき、移行に空白が生じ、この波にのることのできない階層が生じる。不満が昂ぜずにはいない。徳川幕府が倒れた原因のひとつは、インフレであった。開国の政策がインフレを招いたのである（そればかりではなかったにせよ）。

当時、開国を決断したのは、正しかった。時勢がわかっていた。しかし正しい政策をとることは、必ずしも、正しい政策をとった政権の長命を保証しない。

中国が近代化政策をとる報道が新聞にぎにぎしく登場し

レッド★チヤイナ の崩壊

12

一九八九・六・四は歴史的な日となった。中国の人民解放軍が人民の殺戮を始めた日は、二百年前の一七八九・七・一四がフランスの一時代の終焉を告げたごとく、中国の二時代を葬った。多くの知識人がその夢を託した社会主義の希望の星は天安門の血に染まった。

- 中嶋嶺雄
- 飯田経夫
- 竹内実
- 平松茂雄
- 野口鐵郎
- 俵孝太郎
- 椎名素夫
- 村松暎
- 駒田信二
- 張競

(中国人留学生)

中曾根康弘の「教養」

リクルート事件で最も問われるべきは日本の政治家の教養程度ではなかったか。

松本健一

184

どの宗教が「煩惱」に寛容か

ひろよちや

130

口が裂けてもいえないモノローグ……江戸文人

84

「言論の自由」はお題目に過ぎない。日本は言論不自由国で、云ってはならぬ、書いてはならぬことが多過ぎる。せめてモノローグで思う存分に――

- エゴン・シーレの「ひとり芝居」……………栗津則雄 68
- 勝海舟に喧嘩を売った女……………加来耕二 58
- さくら追想曲＝不良日記……………百瀬博教 178
- フランス人はなぜ多産になったか……………木村尚三郎 232
- 私が「ハナエ・モリ」になった日……………森英恵 180

- たかが珊瑚＝夜明けの新聞の匂い……………曾野綾子 208
- 楽しかりし日々……………森敦 228